

「尉」の謡～能楽雑感(152)

去る9月16日のこと、鎌倉の小山舞台で、勉強会を催しました。

番組四番の中の通盛と玄象の二番は、前シテが尉で、共にご婦人が担当されました。お二人ともとてもお上手でしたが、何かが足りない。謡っているご本人も、その足りないところを認識していないと感じました。

尉の謡は、私自身も良く分からないことも多く、ここで、論ずるには忸怩たるものがありますが、自分なりのイメージに基いて、日頃心がけていることを記しておきます。

尉の謡い出しには、初番物に例を散ると、高砂や淡路では「閑カニ」、四番目物の蟻通しや善知鳥では「抑ヘテ確カニ」、今回の通盛や玄象では、初番物同様、「閑カニ」の注釈が付いています。

アマチュアの場合、この注釈に忠実に従おうと思うあまり、もっと本質的なこと、即ち、「強さ」がなおざりにされるのではないかと。

「尉もの」と言っても、曲種は様々なので、気合と力の配分はおのずから考慮に入れなくてはならないでしょうが、画一的に、注釈の「閑カニ」「抑ヘテ」に囚われ過ぎると、声に張りとか艶が無くなり、地味に徹してしまい、その結果、謡ではない謡でしかなくなってしまう虞れがあるように思います。

まして、女性が尉を謡う場合、声質の重い人なら兎も角として、そうでない人が謡うと、どうしても軽い謡になりがちなので、意識的に（或いはわざとらしく）音程を引き下げる必要はないのではないかと。

また、男女を問わず、特に、高砂に代表されるような本格的な初番物や善知鳥のような強い執心ものにおいては、注釈がどうあれ、先ずは漲る力の表現が極めて必要なもので、意識して音程を下げる必要はないと思うのです。如何なものでしょうか。

2015年 09月 19日

今日はさる同好会で、「定家」の地頭を担当しました。

おシテは90歳のご婦人。声だけ聴いていれば40歳と言ってもいいくらいの艶があり、声量も豊かで、神経を集中させながら心を込めて謡いました。

地謡の方々に、事前に「ハネ張りを入れたいので宜しく・・・」とお願い、了承を得ておりました。

謡が進んで、最後近く「故のごとく・・・」の件で、少々遊び心が湧いてきて、ここからメラシて謡ってみたのですが、これは失敗で、完全に二重音になってしまいました。

ベテラン揃いの会だったこともあって、気を許してしまったことを反省した次第です。

一方、2年ほど前のことですが、「芭蕉」の地頭を仰せつかり、謡い終わって先輩の女性から「最後のハリをメラシて欲しかったのに・・・」と言われてしまったことがあります。

上音を下に替えて謡うのは、「砧」とか「鸚鵡小町」とか上級の謡には間々ありますが、アマチュアの地謡では、これがなかなか以心伝心と言うことにならないのが残念です。

ハネ張りなどと共に、声調を変えたいときは前もって地頭は地の皆さんにそのことを伝えておいた方が良さそうです。

替えての上音とは逆に、高く替えてとる謡もありますが、それは別の機会に・・・

(平成27年9月12日記)

2016年 08月 29日

白謡会のメンバーなら「かぶる」の意味をご存知の方も多いたと考えて、今まで小欄で取り上げたことはありませんでしたが、去る8月21日に久良岐舞台で開催された研究会に出演され、江口の地頭などを担当して頂いたFさんが、直会の席で私に「今日は、地謡に参加される方が多かったので（お役を除き15人）、少し『かぶり気味』に謡ってみました」と言われたので、少し解説してみようと思いつきました。

江口の地頭が「かぶり気味」に謡っていることは見所で分かっていたのですが、Fさんが意図的にかぶった謡をなさったことを後で知らされて、このことを参加者に知って欲しいと考えたからです。

「かぶり」を入れる場所は、概ね2つに分かれています。

その一つは、拍子不合でのシテとワキの掛け合いの後に、地謡の上歌につなげる部分です。

「高砂」に例を取りましょう。

初同の上歌「四海波・・・」の前に、ワキ「よくよく聞けば有り難や」で始まるシテとワキとの掛け合いですが、徐々にシテとワキとの謡い出しの間が縮まってきて、ワキが「松も色添い」で謡を引いている間に、シテが「春も」をかぶせ、シテがこれを引いている間にワキが「長閑に」をかぶせる・・・です。

こういう時は、お互いに詰めよって、かぶせるタイミングを図りますが、相手がかぶせ易くするように引きを相手がかぶせてくるまで伸ばしてやる（限度はありますが・・・）のがエチケットと言うものでしょう。お互いの以心伝心があつてこそ、地の上歌が出やすく、且つ、そこに迫力が生まれることとなります。

もう一つは、地頭による「かぶり」です。言うまでもなく、地謡は揃っていることがシテを補佐する意味からも、観客を魅了させるためにも、また、地謡参加者が満足感に浸る上でも必要不可欠ですが、そのためには、地頭のリードが不可欠です。地頭の発声に対して間髪を入れず謡い出さなくてはなりません。陸上競技に例えるならば、副地頭以下の地謡参加者はランナーで、地頭はピストルです。勿論、ピストルがなる前に走り出すのはご法度ですが・・・。

地謡参加者にシグナルを送るのが地頭の役割ですが、それを直ちとというか、咄嗟に引き継ぐのが副地頭の役割です。地頭の発声に間髪を入れず、音の高さとか、情感をくみ取って地頭に合わせなくてはなりません、

ですから、副地頭にとって、地頭がわずかながらかぶり気味に発声してくれると助かります。地頭は副地頭とコントラクト・ブリッジを演じているようなものです。

ところで、地頭がかぶる謡をしなくてはならないのは、地謡参加者が大勢のとき、地謡参加者のレベルがあまり高くないときです。

しかし、そうは言っても、かぶせ過ぎては謡に品位がなくなりますから、副地頭のサポートが重要になります。

能楽雑感（120）～謡本のふり仮名（ルビ）

2019年 05月 09日

会友の一人から。「明治から大正に変わったときに、『大典』という曲が出来たのだそうですね」と言われて、はたと膝を打ち、これを春の会に出そうと決めました。

百番集にも掲載されていますが、謡ったことはありませんし、謡を聞いたこともありません。勿論、私の手持ちの本のなかにもありませんでした。

早速、檜書店の社長に電話して、本を取寄せることにしました。

ところが、「今、在庫少なくなり、増刷を手配中です」との返事。取り敢えず、在庫の5冊をすべて送ってもらいました。2月下旬のことでした。

改めて、謡ってみると、様々の感想がありました。「こはぜ・・・」に記載の通りです。

謡の技術面に限って言えば、とにかく読み違いしそうな、難解な発音が多いことが、特徴の最たるものでしょうか。読み仮名を振っていなければとても謡えたものではありません。

例えば、宮中の水田の名前の「悠紀主基」～ユキスキ、酒を貯める「甕」～ミカ、「戎狄蠻夷」～ジウテキバンニ、圖負える～フミおえる・・・などなど

読み仮名を振ってもらわないと、漢字世代の私でも、これは無理。

「梅」に至ってはもっと驚き。この曲は、江戸時代中期の「明和」のころに作られた新曲だそうですが、難解な発音の方が恰好がよいとでも思っただろう。

名宣に次いでサシ謡で、「寛（ユタ）けしや」ときて、すぐに「花いまだ含み（フフミ）て」とくる。更に、「美しき（うつくしき）・・・」のすぐ後に、美てふ（うまちょう）・・・と続くのですから。

大成版で、フリガナなしでは謡えないのが、高砂にも出てくる「住吉」でしょう。「スミヨシ」と読んだり、「スミノエ」と読ませたり。

大分以前のことで、さる同好会で、大先輩の方が「安宅」の勸進帳のくんだりで、「・・・夫人（ブニン）に別れ・・・」と謡われました。

私は、「フジン…」と濁らないで謡っていたので、ドキッとしました。50年以上も使っている本ですから、かなりすり減っていて、夫人のルビが良く判別できません。濁点を示すような「一」の記号が見え隠れしています。すっかり自信を無くして、流友に、そっと教えを請いました。

彼女曰く、『ブニン』ではなく、『フジン』です。傍らの「一」の記号は、「片地」を意味していますから、濁点ではありません」との返事を頂きました。

夫人で、思い出しましたが、「咸陽宮」では、花陽夫人（カヨウ ブニン）と濁り、「花筐」では、李夫人（リフジン）と濁りません。

たかが清濁の問題ですが、若い頃、読み違いはもっとも慎むべきことと教えられてきましたので、どうしても気になってしまいます。

最近、同好会などで、読み違いが急増しているように感じています。

これには、以下の二つの理由があると思っています。

1. 若い頃から読み違いしていて、これが身についてしまった～注意力の問題
2. ふり仮名が読めなくなってしまった～視力の問題

他人様の批判は出来ません。私もつい最近、読み違いをしてしまいました。それをやらかした時もショックでしたが、何日かして、どの本のどの部分で読み違いをしたのか、思い出せなかったことが、もっとショックでした。